

人間発見

遺児に奨学金を毎月送ってくださるあしながおじさんを募集します。1979年に発表すると、1カ月で約1500人が集まった。支援の輪は飛躍的に広がりはじめた。インフレと不況で資金が底を突きかけた局面を打開するためのアイデアでしたが、寄付者と遺児の心の交流を図る制度になりました。

ところが多くは庶民で、小遣いを節約して送ってくれる中高生もいました。「月5千円の短足おばさん」でもよいですか」と電話してこられた主婦もいました。貧しさを経験された方も多く「定時制しか出られなかったので」「内職で寄付する」という申込書も届き、事務局の私たちは感動の涙を流しました。遺児たちも当初は「お金持ちが同情で恵んでくれるんだろう」と斜に構えていました。で

あしなが育英会会長 玉井 義臣さん よしおみ 遺児の心にかける虹 ④

すがあしながさんたちの参加動機の手紙を輪読するうちに、真心を知るようになりました。彼らは無償の愛を知り、世の中に恩返ししたいと献血や災害遺児への奨学金制度を提案しました。あしながさんが遺児の師となり、他者のための愛の行動が広がったのです。

交通遺児育英会の活動が軌道に乗った頃、会機関紙の編集職員で25歳年下の林由美さんと恋に落ちた。がんを患っていた由美さんと結婚し、4年足らずで死別した。

が、一緒に食卓を囲み、週末は散歩しました。がんは日ごとに進行し、手術や入院を繰り返しました。仕事帰りに病室へ駆けつけて看病するなど、濃密な時間を過ごしました。由美は89年に「ありがとう」の一言を残して29歳で亡くなりました。病床でも最期まで周りに笑顔で気配りをしていた由美を、私は今でも人生の師だと思っています。

寄付者の真心知る 妻とはつらい別れ

阪神大震災で、心のケアも必要だと気付いた。

救済を災害や病気などによる遺児全般に広げようと93年にあしなが育英会を設立し、交通遺児育英会は退職しました。95年に阪神大震災が起き、訪問調査で573人の遺児を確認しました。父を失い、虹を黒く塗りつぶした絵を描いた男児がいました。心の傷の深さを目の当たりにして、悲嘆を癒やす必要性に気付かされました。

先進的な米国へ視察に行き、子どもたちが思い切り体を動かして、感情を吐き出せるような施設「神戸レインボーハウス」を建設しました。どうすれば傷ついた心をケアできるか、専門家の協力を得ながらスタッフもゼロから学びました。遺児と親を物心両面でサポートする理念はこのとき生まれました。



妻の由美さんは、結婚したときにはすでにがんを患っていた

新婚生活は幸せでした。由美は手のしびれで包丁は持てませんでした